

中世興福寺における別当就任儀礼

「印鑑用意條々」を通して

西 弥生

Protocol for Inducting Stewards into Kofukuji Temple in the Middle Ages as Seen through the Inyaku Yoi Jojo

はじめに

- ①「印鑑用意條々」とその内容
- ②「印鑑渡」の次第
- ③「印鑑渡」と寺務奉行
おわりに

【論文要旨】

本稿は興福寺における別当就任儀礼である「印鑑渡」について検討したものである。国立歴史民俗博物館に所蔵される室町前期成立「印鑑用意條々」（水木家資料）は、顕守によって執筆され、興福寺の一院家である東院に伝来したと判断される。その内容は、「印鑑渡」の支度に焦点を当て、大乘院方の記録を抄出したものである。

興福寺別当の就任は、口宣案および藤氏長者宣によって別当に補任され、春日社へ就任の奉告をした後に「印鑑渡」が舉行されるといった一連の流れで実現する。「印鑑渡」の次第は、吉書の儀式、三会（三藏会・法花会・慈恩会）の放請から構成され、続いて金堂著座が行われる。新任別当の就任を寺院社会に向けて披露するのが「印鑑渡」の趣旨であり、新任別当が加判した吉書および放請への押印が「印鑑渡」の象徴的所作であると言える。

「印鑑渡」の舉行手続きにおいて重要な役割を果たしたのが「寺務奉行」である。「寺

務奉行」には諸職に対する招請文書の発給や諸道具の用意、記録作成など種々の任務があった。大乘院・一乗院の両門跡から別当が就任した場合、その「寺務奉行」には坊官・侍の随一たる者が選任される慣例であり、とりわけ大乘院に関しては坊官家として知られる福智院家より輩出された例が複数確認される。

「印鑑渡」について、次第・支度・舉行手続きの実態を探りつつ「印鑑用意條々」の性格を検討するに、「印鑑渡」において「寺務奉行」を務めることになった顕守が、大乘院方の記録を参照し、個人的に必要な「寺務奉行」に関わる部分を抄出した、実務的要素の強い記録と言える。

はじめに

寺院において行われる儀礼に関する先行研究を概観すると、法会のように宗教的性格を有する儀礼に関心が集中している傾向があるが、そのような宗教儀礼と並行して社会性の強い儀礼も行われる。本稿において検討対象とする「印鑑渡」はその典型的な例であろう。

「印鑑渡」とは、一般的に、「官符の長官や寺社の長者の交代時に印鑑を渡すことから、『印鑑渡し』が前任者から後任者への事務引継ぎを意味し、印鑑が官府や寺社を統轄する職務・職権の象徴ともされた」と理解されているが、具体的な検討は必ずしも十分とは言えず、歴史的側面から解明すべき多くの問題を残している。そこで本稿においては、一例として、南都興福寺において別当就任の際に執り行われた「印鑑渡」を素材として、その実態がいかなるものであったのか考察を試みたい。具体的な様相を探るための素材として、本稿においては国立歴史民俗博物館所蔵「印鑑用意條々」⁽²⁾や『大乘院寺社雜事記』を用い、これらの記事をもとに、「印鑑渡」がいかなる次第で執り行われ、どのような人々が「印鑑渡」を支える諸職として関わったのか、またいかなる手順で挙行手続きがなされたのかを検討しつつ、「印鑑渡」挙行に伴って「印鑑用意條々」が作成された背景について考えてみたい。

さて、興福寺の「印鑑渡」に関する先行研究としては、管見の限りでは「印鑑渡」の儀式そのものに焦点を当てた論稿は見出されないが、稲葉伸道氏『中世寺院の権力構造』⁽³⁾第四章「興福寺政所系列の組織と機能」において「印鑑渡」に言及した部分が見られる。稲葉氏は、乗信による正応二年（一二八九）十月の奥書をもつ、成實堂古文書「大乘院文書」所収の「御寺務部」第一に拠りながら別当補任の手続きを次のように整理されている。三度の長者宣による補任がなされると、それに対して別

当が請文を出す。その後、三綱の群参があり、供目代を除く諸目代が補任される。綱所賀札および官符が到来した後、印鑑渡の儀式の準備を修理目代・通目代・供目代に御教書をもって命ずる。そして印鑑渡が行われ、中綱の補任、寺領の預所・定使の補任、率川社の神主の任命をする、といった一連の流れで別当の補任がなされるとのことである。また、稲葉氏は「印鑑渡」については、「別当就任時の重要儀式である」とその重要性を指摘しておられ、興福寺の印鑑を納める「通庫」の管理を担う通目代が、「印鑑渡」の際、「印鑑を通庫から出し別当に渡す役割を果たした」と述べておられる⁽⁵⁾。

「印鑑渡」という儀式名称は、『大乘院寺社雜事記』に散見されるほか、先に挙げた「印鑑用意條々」の外題に「印鑑渡條々」とあることから、少なくとも室町時代以降には、興福寺における別当就任儀式の名称として定着していたと考えてよいであろう。「印鑑渡」は、法会とは異なり社会的要素を有する儀礼ではあるが、一定の次第に沿って進められる点では法会に共通する。以下、「印鑑用意條々」の概要を把握した上で、「印鑑渡」の次第・支度および挙行手続きの実態について、具体的に検討していくこととする。

①「印鑑用意條々」とその記載内容

国立歴史民俗博物館に所蔵される室町前期成立「印鑑用意條々」一帖は、仮綴の折本で、大きさは縦一五・〇厘、横一四・二厘である。料紙は楮紙で、一六丁から成っている。外題に「印鑑渡條々」、内題に、「印鑑用意條々 此外注落事可在之、能々可勘見也」と記されている通り、「印鑑渡」に関する事柄のうちでも、とりわけ挙行に先立って整えられる支度および手続きに焦点を当てた記事となっている。表紙の右下に「東院」とあるのはこの史料の伝来を示し、左下に「顕守」とあるのは記主と判断さ

れる。顕守は、仏地院孝俊の別当在任期間である応永二十三年（一四一六）に「寺家三十講記」⁽⁶⁾を執筆しており、その奥書には、「応永二十三年丙申十二月廿三日 出世奉行顕守」とある。また、『大乘院日記目録』によれば、東北院権僧正俊円（抑）の別当在任中である嘉吉二年（一四四二）十月十六日条にも、「維摩会出仕、於切芝儀、権別当出仕之時、専・他丁衆不下壇、不及礼節、結日出仕之時、不得其意之由、出世奉行顕守被問答」とあり、顕守が室町前期に出世奉行として活躍したことが確かめられる。この「印鑑用意條々」は、正和四年（一二二五）・弘安四年（一二八二）・康永二年（一三四三）・弘安元年（一二七八）・貞和五年（一三四九）に挙行された「印鑑渡」に伴って作成された記録の抄出を並べる形で構成されている。冒頭に掲げられた正和四年の記は大乘院尊覚が同年二月の別当就任時に挙行された「印鑑渡」に関わるものである。第二に、「弘安四年記云」として、弘安四年（一二八二）四月、別当に就任した大乘院門主慈信の「印鑑渡」挙行にあたっての手続きが記されている。第三に、康永二年（一三四三）八月十日付の東金堂大行事補任に關し、法橋泰舜が発給した奉書等が見られるが、これは同年八月、大乘院門主孝覚の別当就任に際してのものと判断される。第四として弘安元年の記は、同年正月、大乘院尊信の第二度目の別当就任に際して行われた「印鑑渡」に関連する文書である。第五に挙げられた後六月十四日・十五日付の文書は、貞和五年（一三四九）閏六月、大乘院門主孝覚の二度目の別当就任に伴って発給されたと考えられる。以上のように、五カ年分の記録はいずれも大乘院方のものであることが確かめられる。

先に示した顕守筆「寺家三十講記」の奥書にも、「東院僧正御房及同年雖被求旧記、更首尾之日記無之、東院寛円僧正御房日々記ニ少々有此事、并大乘院御記少々被出之」と記されていることから、顕守が大乘院方の記録を入手可能な立場にあったことは間違いない。大乘院から別当が補任された場合の「印鑑渡」についてまとめた記事をもつ史料と

しては『大乘院寺社雜事記』があるが、そのほかに数多く存在するとは言い難い。そうしたなかで、この「印鑑用意條々」は、『大乘院寺社雜事記』の現存する宝徳二年（一四五〇）から大永七年（一五二七）以前における「印鑑渡」についての具体的記述が見られる点でも、極めて重要な史料であると言えよう。

「印鑑用意條々」の内容を概観すると、「印鑑渡」を挙行する場の料理や諸道具について、また出仕する諸職についての記事が目立つ。特に一三丁表の後半部から一六丁表の本文末尾までは、新任別当による諸職の招請および任務遂行の仰せを伝達した奉行人奉書が複数転写されており、これらが書様として代々受け継がれていたことがうかがわれ、「印鑑渡」挙行のための具体的な手続きを知る上でも有効である。表紙に「東院」との記載が見られることから、東院院主の別当就任に伴う「印鑑渡」において、顕守が奉行人としてその運営に関わったと推察され、果たすべき役割を大乘院方の記録に求めて抄出したと考えられる。顕守の活動時期と照らし合わせて「印鑑用意條々」の執筆時期を考えるならば、東院からは光暁が応永二十一年（一四一四）と永享二年（一四三〇）の二度にわたって別当に就任しており、顕守が大乘院方の記録を先例として参照している状況をふまえると、応永二十一年の「印鑑渡」挙行に際し、先例を学んで実践に役立てる目的で作成したのではないかと推測される。

「印鑑用意條々」の最初に掲げられた、正和四年における大乘院門主尊覚の「印鑑渡」の支度に関する記述のなかに、「一参会三綱 寺主法橋（予宿装）東」とあり、この正和四年の記録は、「予」すなわち玄舜が執筆したことが分かる。この玄舜についてであるが、『興福寺三綱補任』に「寺主法橋玄舜」とあるほか、『大乘院具注曆日記』⁽⁷⁾に、「玄舜頓死了、不便々々、院家管領事、此間其仁之間、細々事等玄舜令奉行了、他界之間、奉行分猶又無其器」とあり、門主に奉行人として仕えたことが分かる。また、江戸時代に編纂された『地下家伝』⁽⁸⁾に大乘院家の坊官家として掲

げられた福智院家の系図中にも、玄舜の名が確認される⁽⁹⁾。

さらに、「(貞和五年) 後六月十四日」および「後六月十五日」付の奉書五通が転写されているが、これらの文書を発給した法眼泰舜も「地下家伝」に見られる福智院家系図中に、「泰舜玄舜男」とあるように、玄舜の息であったことが知られる。また『興福寺三綱補任』には「会所寺主法眼泰舜」とある⁽¹⁰⁾。

以上のように、「印鑑用意條々」は、「印鑑渡」の支度・手続きについて複数の記録から抄出した実務的要素の強い記録としての性格をもつ。ただし、抄出である以上、必ずしも順を追って「印鑑渡」挙行に至るまでの状況が記述されているとは限らず、記主の求める実用に即した先例等が任意に転写されているのが特徴である。そこで次節以下では、「印鑑渡」そのものがいかなる儀礼であったのか、次第・所作という面から検討するとともに、「印鑑渡」がどのような手続きをもって挙行されたのかを辿りつつ、「印鑑用意條々」が作成された背景について考察してゆくこととする。

②「印鑑渡」の次第

本節においては、「印鑑渡」の次第についての検討を試みたい。その前提として、「印鑑渡」が儀式としての体裁を確立する以前の状況についてであるが、源頼房の息である隆覚の別当就任に関して『興福寺別当次第』に、「保延四年十月廿九日^{壬午}、十一月七日下午、参于御社、被請取印鑑」とあり、「印鑑渡」と称されていたか否かは別として、別当就任に際して印鑑の請け取りが保延四年(一一三八)、春日社においてなされていたことが確認される。また、「興福寺三綱補任」によれば、範玄の別当補任について、「建久六年十二月廿五日任、於京都令奉給、同廿六日下午、廿七日被成吉書」とあり、建久六年(一一九五)には吉書

の儀が行われている。後述するが、吉書の儀は、室町時代に見られる「印鑑渡」に次第の一部として組み込まれている。

次に、「唐院古文書」⁽¹¹⁾に、雅縁の別当就任儀礼に関わる記録が見られる。奥書に、「建久九年十二月廿七日、法印権大僧都雅縁於西院受取印鑑、被放堅義間、供目代範豪令言上菩提山前法務大僧正御房之剋、蒙仰之趣如右」とあり、これは供目代範豪の記録であると推測される。ここには建久九年(一一九八)十二月、別当雅縁が西院において印鑑を受け取ったことと、三会(法花会・慈恩会・三蔵会)放請の有様が記されている。請定に押印した上で印鑑箱に納めるという儀式内容は、室町時代の記録に「印鑑渡」として見出される次第の一部とほぼ同様であると言える。さらに、先に挙げた「御寺務部」第一によれば、宝治三年(一二四九)正月五日、実信の別当就任に伴って執り行われた儀式の次第等が記されているが、これは吉書の儀式、三会の放請、金堂著座といった要素から成っている。

このように、興福寺において別当就任儀礼として挙行される「印鑑渡」の原初形態を探ると、就任時における印鑑受け渡しは少なくとも平安院政期にはなされていたようであり、鎌倉前期においては吉書の儀が見られ、印鑑受け取りと三会の放請が併せ行われた例が確認された。そして、鎌倉中期に至って一連の儀式次第が完成され、室町時代には「印鑑渡」との名称をもって定着していたのではないかと推測されるのである。

そこで、「印鑑渡」がいかなる次第に基づいて執り行われ、どのような所作がなされたのか、『大乗院寺社雑事記』寛正二年(一四六一)二月条から三月条にかけて詳細にわたって記された、経覚の別当補任記事素材として考察を進めていくことにしたい。なお、経覚は応永二年(一三九五)、関白九条経教の子として生まれ、同三十三年から文明元年(一四六九)まで四度にわたって興福寺別当の職に補任されており、寛正二年の記事は第三度目の就任に関わるものである。

まず、「印鑑渡」を挙行するまでの手続きを確認しておきたい。二月十六日条によると、「一戊剋、光兼僧正捧納於寺庫云々、公文・通両目代奉行之了」とあり、前任者である光兼が印鑑を寺庫に奉納している。

この印鑑奉納を前任者退任の指標として、翌日、伝奏日野大納言勝光が経覚の寺務宣下の案内をし（二月十七日条）、新任別当のもとでの諸職の選任が開始されて、実質的な別当交代ということになる。そして、二月廿二日条によれば、「宜為如旧興福寺別当」との口宣案が到来し、正式に別当として補任されている。続いて二月廿四日条に、長者宣請け取りの儀の様子が記され、「長者宣書様」として以下の三通が掲げられている。⁽¹²⁾

被長者宣偈、被補興福寺別当了、官牒未到之間、守先規、且可被致沙汰者、長者宣如此、悉之、謹状、

寛正二年二月廿二日 左大弁経茂幸^(経覚)

謹上 安位寺僧正御房政所

被長者宣偈、以前大僧正法印大和尚位経覚、宜為諸供別当者、

寛正二年二月廿二日、――

被長者宣偈、以前大僧正法印大和尚位経覚、宜為龍門・龍蓋寺両寺別当者、

寛正二年二月廿二日、――

これらは「三度長者宣」と称して藤原氏長者から下されるもので、それぞれ「興福寺別当」補任、「諸供別当」補任、「龍門・龍蓋両寺別当」補任を内容としている。これに加え、「被長者宣偈、寺中恒例吉事、任先規可敷行之由、宜遣仰者、長者宣如此、悉之、謹状、」との文言をもつ「吉書長者宣」により、寺の恒例吉事を先例に従って勤行するよう命じられる。長者宣請け取りの儀において、別当は長者宣を拝見した後に

請文を出す。また、同じ場で、別当宣下の慶賀を表する「綱所賀札」が別当に対して進上される。

以上のように、宣旨・藤氏長者宣による別当補任がなされ、次の段階として興福寺内において挙行される就任披露の儀式が「印鑑渡」であり、陰陽師による日次選定や諸職の招請と並行して儀式の料理・支度等が整えられてゆくのである。

「印鑑渡」当日である三月廿三日条によれば、別当は「印鑑渡」に先立って就任の奉告のため春日社参をし、その後、東室において「印鑑渡」が開始される。

第一幕として、法服・平袈裟・草鞋を着した長吏（別当）が、奉行の案内によって母屋の端座に著座する。印鑑入門の時分を見計らい長吏が起座して一拝し、再び著座する。使所司・護監により印箱・鑑箱と唐鑑が長吏の御前に進め置かれる。この印箱の寸法は長一尺四寸・広九寸三分、高五寸であり、中には大小の印二面（御寺印・大供印）・鐵錘・衾一帖・丹器・丹一裹が納められている。鑑箱もほぼ同様の寸法で、宝蔵鑑五つと通倉鑑が入れている。唐鑑は木柄の付いた長一尺九寸の横鑑である。⁽¹³⁾

通目代が印箱の鎖を抜き、護監が印箱を開けて印その他の諸道具を取り出す。通目代が吉書三通を持参して着座すると、硯役が硯・統紙・封紙を通目代の前に置く。通目代が長吏に吉書三通を進上し、御判を申し請い、加判の間は御前に蹲踞して待つ。続いて通目代は吉書を公文所に持ち出して三綱の署名を取って元の座に戻り、吉書を護監に渡す。護監は吉書に七箇所押印し通目代に返すと、通目代は披見して三通を一緒に巻いて再び護監に渡し、印箱に奉納する。通目代は日記をしたためて御判を申請し、護監が三箇所押印すると、同じく印箱に奉納する。そして護監が諸道具を印箱に納め、鎖を長吏に押し向けると通目代は封紙に御判を申し請い、印箱を封じ、同時に白紙の封も付す。続いて同じく通目

代が鑑箱から七つの鑑を取り出して並べ、覧観して奉納すると、封紙に御判を申し請い、白紙の封を付して鑑箱を封ずる。次に唐鑑を二つずつ覧観した後、通目代は著座する。これらの所作が終わると長吏は奥座に着し、堂童子による仏聖鐘を合図に、使所司と護監は禄物を賜わる。この後、長吏は装束を鈍色・五帖袈裟に替え、同時に場の料理も改められる。

次第は第二幕へと移り、装束改めを済ませた長吏が母屋の端座に着座すると、出世奉行が公文所において供目代に参上するよう促す。その際、供目代に対し、「任当門跡之例、可為大供小印」、すなわち大乘院門跡の先例に従って、大小二面の印のうち、「大供印」を用いるよう命じる。供目代は三蔵会分二通・慈恩会分六通・法花会分十通の放請を持参して長吏の御判を申し請う。長吏が加判すると、供目代は放請を受け取り着座し、通目代が印箱の鎖を抜いて供目代に鎖を押し向ける。供目代は印箱を開けて諸道具を取り出し、放請一八通に「成印五ヶ所」⁽¹⁸⁾との所作を行う。供目代は押印すると印等を箱に奉納して鎖を長吏に押し向ける。続いて通目代が参上し、印箱に封紙を付した後、鎖を供目代に押し向けて退く。これらの所作がすべて終わると、供目代は放請を持って退出し、公文所において堅者三口（法花会一口・三蔵会二口）の放請が行われる。以上のように三会の放請の儀が終わると、印鑑箱・唐鑑等は役人によって公文所の棚に運ばれた後、中綱によって保管場所となる伝法院に移され、一献が行われる。

このようにして「印鑑渡」の儀を終えた後、西金堂著座が行われる。⁽²⁰⁾著座に先立って、大諷誦⁽²¹⁾および切灯心の納められた長櫃が堂司に送られる。行列は、中綱六人・御前三綱二人に別当の御手輿が続き、従僧・中童子・大童子・御童子・力者・中間以下が連なっている。東室門より出発して西金堂に到着すると、長吏は輿から下り、堂内へ入る。仏前を経て著座し、誦経の後、退出するというのが金堂著座の概要である。そし

て再び別当は輿に乗って東室に戻り、一連の次第が終了する。

実際に吉書や放請に押印するのは護監ならびに供目代であるが、押印を承認する権限は別当に属する。よって押印は、新任別当の手に印が渡ったことを象徴する所作として「印鑑渡」の中核を成す所作であったと言える。吉書の儀、三会の放請、金堂著座という一連の儀式は、印鑑が新任別当の手中に移ったことを視覚的に表現したものに他ならず、臨席者に別当交代および新別当のもとでの寺家運営開始に対する認識を促すことも、「印鑑渡」を挙行する目的の一つではなかったろうか。

ここで、他寺における長官の就任儀礼について少々触れておきたい。一例として、醍醐寺座主の就任に伴って行われる拜堂に関して、土谷恵氏は、「座主が三綱・権官・勾当以下を率いて下醍醐の伽藍の中心たる釈迦堂に入室し、座主補任の官牒を披露し、さらに三昧堂・五重塔・清瀧宮以下の伽藍を拜し、また「寺家の側では、新任の座主に対して執行・三綱以下が拜礼を行う儀式があり、その後に寺家の印鑑を請じて吉書を作成し、着座の饗がなされる」としておられる。⁽²²⁾この「拜堂」は東大寺別当の就任儀式としても行われることが知られている。⁽²³⁾

このように他寺の事例と比較してみると、興福寺別当の就任儀礼においては次第の中に「拜堂」が含まれていないことが分かる。可能性としては、春日社参および金堂著座が「拜堂」に相当するものとして興福寺内では考えられていたのではないかと推測される。また、他寺においては見られない三会の放請についてであるが、『尋尊御記』⁽²⁴⁾に拠れば、三会とも興福寺の「十二大会」に含まれている。三蔵会は原則として北円堂で勤修され、法相教学の始祖玄奘三蔵の忌日法要としての側面も有する。法花会⁽²⁵⁾は、藤原冬嗣が父内麻呂の忌日である十月六日を結日として弘仁年中に開いた法会とされ、冬嗣ゆかりの南円堂を会場とする。また、慈恩会は法相宗の宗祖慈恩大師の忌日である十一月十三日に勤修される法会である。これら三会の放請が「印鑑渡」の次第に組み込まれるのは、

三蔵会、法花会、慈恩会の堅義遠業が維摩会講師選任の条件であり、十二大会の中でもとりわけ格が高く、興福寺を代表する法会とみなされていたこと⁽²⁵⁾によると考えられる。

本節においては、寛正二年二月・三月における経覚の別当補任関連記事に基づいて「印鑑渡」の次第を検討してきた。「印鑑渡」は、前任・新任の別当が同席して挙行される儀式ではなく、あくまで新任別当を主体とするものである。藤氏長者宣による新別当の補任がなされ、それを受けて興福寺内において「御寺印」「大供印」を押すという象徴的な所作を通して別当就任の事実が表現され、寺務運営の中枢に位置する面々がその場を共有し各々の任務を遂行することで、新別当を支える寺職の全貌を把握したのである。

では次節において、「印鑑渡」がどのように運営されていたのかという点について検討してゆくこととする。

③「印鑑渡」と寺務奉行

前節において検討したように、次第を順に見ていくと、「印鑑渡」には様々な諸職が参仕している。また、次第上に現れてはいないものの、「印鑑渡」の挙行を支えた人々は僧俗にわたって数多く存在したはずである。興福寺を代表する別当の就任儀礼である「印鑑渡」に関与するということは、「印鑑渡」後も寺家経営に一定の役割を担うことになる。本節においては、「印鑑渡」における人的要件と物的要件がいかなる手順で整えられたのか検討する。

『大乘院寺社雑事記』寛正二年三月十七日条によると、「印鑑渡」を行うにあたっての手続きが、「御社参方」「御出奉行方分」「公文目代方私書成之分」「奉行方奉書」というように担当の役職により四つに分類して示されており、とりわけ三月十七日付で発給された複数の文書が転写

されている点が注目される⁽²⁶⁾（五二ページの表参照）。

まず、「御社参方」とは、「印鑑渡」に先立って行われる春日社参に關する事柄を指し、表中のA・Bがこれに該当する。両者とも縁舜が奉行人として発給した折紙奉書であり、社頭御師と思われる八条権預に宛てたAは、「来廿三日巳刻、為御祝申、御寺務可有御社参候、如先々可被参向之由、被仰出也」との文言にある通り、別当の社参に参じるようにという別当の仰せを伝達した文書である。Bは按察法橋御房^(清賢)に対して出され、同じく廿三日の社参にあたつて、御幣紙の準備を命じる別当の仰せを伝える内容である。「御社参方」としては、このほか力者を召す折紙を発給し、また大童子・座法師・幣役人・従僧や、興・馬の手配を行った。

第二に、「御出奉行方分」を見てみよう。御出奉行とは別当の御出に供奉する役人である。表中のCがこれに該当し、縁舜が公文^(縁舜)権上座御房に宛てて折紙奉書を発給している。内容としては廿三日に行われる西金堂著座の「御前三綱」として寛貞寺主・孝乗寺主を、および「御前中綱」を召集するようにとの別当の仰せを伝達する文書である。このほか「御出奉行方分」としては、力者・中童子や松明の手配も含まれている。

第三に、「公文目代方私書成之分」として、権上座縁舜から信乃寺主御房・越前寺主御房の両名に対して発給されたDはCを受けて出された奉書であり、西金堂著座の御前役に關わる文書である。公文目代は、護監の召請や、御前中綱の交名を寺家に進上するなどの任務も果たしている。

これらのほかに、「奉行方奉書也」として、縁舜もしくは清賢によって発給されたE・Kがある。この「奉行」について寛正二年二月廿一日条を見ると、「寺務奉行事、清賢法橋・隆舜法眼兩人二被仰付云々」とあり、新任別当である大乘院経覚は、「印鑑渡」の挙行に先立って「寺務奉行」を清賢・隆舜の両名に命じている。しかし、翌廿二日条による

と隆舜が辞退したために継舜を任じ、「諸役人事、各可下知旨」を仰せつけたとあり、「奉行方奉書」とは、「寺務奉行」が別当の仰せを受けて発給した奉書であることが分かる。別当の奉行人として置かれたこの「寺務奉行」という役職について、文明十五年四月廿八日条には次のような記事がある。

一 昇舜寺主・故隆舜法眼、(経覚)安位寺殿御代之寺務奉行之随一也、奉行方記録可進之由仰付之間、持参了、諸院家寺務之時ハ、寺務奉行ハ学侶之内也、引付等致其沙汰、両門寺務之時ハ、坊官・侍之内申次之随一、必々為寺務奉行、代々此儀也、悉皆奉行共令記録者也、

この記事によれば、別当が大乗院・一乗院両門跡から出た場合、別当に仕える「寺務奉行」は坊官・侍のうち申次の随一たる者が勤め、諸院家から別当が就任した場合、「寺務奉行」は学侶のなかから選出されるとの慣例があり、記録作成が職務の一つであったことが知られる。安位寺経覚が別当であった時に「寺務奉行之随一」であったと記されている隆舜は福智院家に属しており、もう一方の昇舜は隆舜息である。福智院家の坊官が大乗院所属の坊官として門主の奉行人に任命されたことは先行研究により明らかにされているが、(27)別当の奉行人という役職にも抜擢され、寺家運営の実務に携わる者を複数輩出したのであり、院家の経営のみならず、寺家経営においても他の坊官家を凌いで頭角を現していたことを示唆している。この記事に示された「寺務奉行」選出のありかたは、「代々此儀也」とあるように文明十五年以前より代々受け継がれてきたようであるが、その慣例は、第一節において掲げた「印鑑用意條々」に福智院家に属する玄舜・泰舜の名が見られ、別当の奉行人を務めたと判断されることから、鎌倉中期から南北朝期まで溯ることが出来ると言えよう。なお、寺務奉行の任命は口頭でなされ、補任状を伴うものではなかったようである。交代の時期は定かではないが、別当の交代が「寺務奉行」選出の一契機となっていたようであり、前任者が引き続きその

任に就く場合もあった。

ところで、「寺務奉行」には諸職の招請や任務遂行を命じる別当の仰せを伝達する以外にも種々の任務があった。寛正二年三月十七日条によると、「一奉行方条々事去康正二年七月八日、隆舜法橋奉行記如此也」として、隆舜の記録が転記されている。これは、隆舜が尋尊の「寺務奉行」を勤め（康正二年二月十七日条）、「印鑑渡」の運営に携わった時に作成した記録である。繁雑ではあるが以下に引用したい。(28)

- 一 公文目代色々任例可下知之由、成御教書事、(1)
- 一 修理目代所役可存知之由、成御教書事、注文同可有之、(2)
- 一 御後見色々所役成御教書事、在注文、(3)
- 一 使所司事、(4)
- 一 役人事、在廻文、(5)
- 一 役中童子二人、一人如木、一人フタコ、(6)
- 一 片屋料理仰会所目代事、(7)
- 一 鐘木之松一本事、近來般若寺山御所望、御教書以堂童子付之、(8)
- 一 硯二三面事、折敷・筆・黒、召御後見、(9)
- 一 被物二重、一重綾、一重織物、(10)
- 一 取口一・提一用意事、(11)
- 一 丹水事、入白土器、(12)
- 一 円座三四枚事、(13)
- 一 会場料理事、小文六帖・紫十帖・大文・御簾十四五間、(14)
- 一 統紙并封紙事、(15)
- 一 羅箱蓋一事、(16)
- 一 当日風雨御祈禱可仰両堂事、召諸進、但公文目代最、(17)
- 一 東室可被借召事、(18)
- 一 同掃除事、但御所奉行最、(19)
- 一 一番中綱絵懸盤一前可召御後見事、(20)

一 鐘木方事、(下略) (21)

一通目代可存知之由、被成御教書事、(22)

一三ヶ日御祝著御事可仰之、修理・会所・公文、(23)

これらのうち、2・3・22に見られる「成御教書事」とは、先に検討した「奉行方奉書」の発給を指し、2には表中のIが、3にはH、4にはG、22にはF、23にはJ・Kがそれぞれ該当する。なお、23は三日間にわたって行われる一献についての通達で、修理目代・御後見・会所目代が調進する。そのほか諸職に関わる項目としては、5の「役人事」や、6の「役中童子」の手配がある。

次に、場の整備として、会場を借り(18)、料理・掃除を行う(7・14・19)。寛正二年には、明德・応永・永享年間の先例に従って東室の料理が整えられた(寛正二年三月廿三日条)。さらに、下行物の手配(21)や、「印鑑渡」当日が晴天となるよう風雨の祈禱も依頼する(17)。その他、次第において必要となる諸道具の用意がある(8・13・15・16・20)。Hに添付された注文に御後見所役分として記載された仏聖履・網布五帖・幔三帖・白縁五帖・草六丈・御間食方五斗、およびIに添えられた注文に見られる修理目代所役分としての假屋三間・御棚一脚・棚一脚・足高・仏聖米・専一・九本物・立沙・大炊替物・番帳札と併せて、物的要件の整備が「寺務奉行」によって図られた。

以上のように、「印鑑渡」当日に至るまでの手続きは、春日社参・金堂著座、および「印鑑渡」の次第のうち金堂著座以外の部分といった分類のもとで進められ、とりわけ実務担当としての人的・物的要件の整備にあたった「寺務奉行」は「印鑑渡」運営の中核として任務を遂行したのである。

ところで土谷恵氏は、醍醐寺における「執行」の存在を挙げ、「三綱の頂点にあつて、寺院経営の実務を担」ったことを指摘され、また十二世紀前半における醍醐寺の組織の特徴として具体例を示し、「執行・三

綱・所司らは、座主元海のもとで醍醐寺政所の構成員であると同時に、檢校定海個人に仕える侍であり、定海房の房官であつた」と述べておられる。²⁹⁾院家方の運営に携わる者が、寺家運営においても実務の担い手として活躍した点は、興福寺の「寺務奉行」にも当てはまるのではなからうか。「寺務奉行」は世襲される役職ではないが、その任務の多様性により自ずと福智院家という一坊官家から選出され、受け継がれる傾向が生じていたのではないかと考えられる。本稿においては、この「寺務奉行」が、興福寺別当の就任儀式たる「印鑑渡」の挙行にあたって、別当の奉行人として新たに任命されたこと、しかし選任の実態に目を向けると、両門跡から別当が出た場合には坊官・侍の筆頭が「寺務奉行」に任ぜられ、門主と坊官という院家方の関係が、別当と「寺務奉行」という寺家方の関係にも及んでいたことを指摘するにとどめておくが、「寺務奉行」の職掌についてはさらなる検討が必要である。³⁰⁾また、「寺務奉行」の関与の有無という点から、個々の儀礼の性格について解明できる部分もあるうと考えられるが、それらに関しては今後の課題としておきたい。

おわりに

本稿は、興福寺別当の就任儀式である「印鑑渡」に関して、その具体的様相の一端を示す「印鑑用意條々」を通して、その次第・支度および挙行手続きの実態を垣間見ようとしたものである。興福寺の「印鑑渡」がいかなる儀礼であるのかこれまで深く追究されたことはなかったが、その次第を概観すると、新任別当が加判して三綱が署名する吉書の儀、三会の放請といった要素から成っていることが確かめられ、別当の就任儀礼をその第一義とすることは言うまでもない。しかし、三蔵会・法花会・慈恩会の放請が次第の一部として取り込まれ、別当補佐の中核とも言うべき役職の任命も併せて行われることで、新別当のもとで新たに開

始される寺家運営を実質的に支えてゆく体制そのものが概観される。また引き続き行われる金堂著座は、東大寺や醍醐寺などの他寺における長官就任儀礼として知られる「拜堂」と称される儀に相当するのではないかとすることも付言しておきたい。

次に、「印鑑渡」を挙行するにあたって必要とされる様々な手続きに注目し、興福寺別当の奉行人として選任された「寺務奉行」の存在と、その多岐にわたる役割について述べた。「寺務奉行」は、別当の仰せを受けて諸職に対し招請および任務遂行を伝達する奉書を発給するほか、「寺務奉行」を勤めた者によって書き上げられた記録によれば、「印鑑渡」の支度全般にわたって「寺務奉行」が手配し、挙行条件を整えた。また、別当が門跡から補任された場合には、坊官・侍の随一たる者が「寺務奉行」に任命されることになっており、大乘院から別当が補任された場合の「寺務奉行」として、大乘院の坊官家である福智院家の者が複数見られることも指摘した。

ここで「印鑑用意條々」に書き継がれた五カ年分の記録を再度見てみると、第三節において示した「一奉行方条々事」として列記された1・23の内容に重なる記載が多々見られ、また弘安五年閏六月の「印鑑渡」関連文書五通は同じく第三節に掲げた表中に見られる、継舜・清賢の発給による文書と内容が一致している。鎌倉中期から南北朝にかけて「寺務奉行」との呼称が寺内組織の中で確立していたか否かは定かでないものの、この「印鑑用意條々」は、「寺務奉行」として「印鑑渡」に出仕することになった顕守の手によって作成された覚書であり、その内容は過去数年分の記録から自身の任務に直接関わる部分のみを抄出したものということは確かである。「印鑑渡」に限らず、寺院において行われる様々な儀礼に際して、あらかじめ先例を把握した上で臨んだ職衆が、その任務を遂行したのち記録を残すことがしばしばあり、「私記」と題したものも目にすることが多い。こうした自身の経験や反省に基づく記

録作成の直接的な目的のひとつとして忘備が挙げられることは言うまでもないが、それに加えて後嗣の参照にも役立てられ、儀礼継承にとって重要な機能を果たしたのである。「印鑑用意條々」もまた「私記」として筆録されたであろう過去の記録を抄出したものであり、特に運営に関する実用的な内容に終始している。顕守が「印鑑渡」出仕後、新たに「私記」を書き残したかは分からないが、少なくとも覚書として用意された「印鑑用意條々」は後任者の参考にもなったであろうことは想像に難くない。寺院における儀礼継承の背景には、出仕者が各々の立場で書き残した記録の参照・書写と、自身の任務遂行に伴ういわば体験記作成という営みがあり、こうして積み重ねられた記録にこそ寺家経営の内実と変遷を見ることができるのである。

註

- (1) 『日本史広辞典』（山川出版社）に拠る。なお、『国史大辞典』には「印鑑渡」の項目は採られていない。
- (2) 水木家資料の中に見られる（日一二四二―四一五六）。
- (3) 稲葉伸道『中世寺院の権力構造』（岩波書店、一九九七年）。
- (4) 東京大学史料編纂所にレクチグラフが所蔵されている。
- (5) 稲葉氏は、花園大学所管「福智院文書」中に見られる、文安二年（一四四五）「通目代記録」（記主権上座威儀師隆舜）を典拠とし、「別当就任時の印鑑渡の儀において別当は『吉書日記』を『印箱』に納め、通目代が封印した。また、別当は『鑑箱』の中の鑑を点検し、通目代が封印した。これらの箱は通目代の命令によって通所の雑掌が通倉から取り出した」ことも指摘しておられる。
- (6) 奥書に、「此引付事、雖非無斟酌、此講演九十余年退転之間、為被再興、東院僧正御房及、兩年雖被求旧記、更首尾之日記無之、東院覺円僧正御房日々記ニ少々有此事、并大乘院御記少々被出之、又自内侍原好繼法眼方、半切之小草子一帖出之、三方之日記雖被引合、首尾更不被心得トテ令狗勞給、雖然以種々御料簡去年無為被遂行畢、仍当年必永世三、於仏地院又被遂行畢、毎年無為珍重也、兩年共顯守奉行之間、後々万一大切事モヤト存計ニ引付之、比興之至、憚多之者也」とある。
- (7) 東京大学史料編纂所蔵レクチグラフに拠った。

(8) 稻葉氏前掲書に拠れば、「地下家伝」は江戸時代の編纂物ではあるが、大乘院家の坊官家として挙げられている福智院家と南院家の系図は信頼性の高いものであるとことである。

(9) 福智院家の坊官が「印鑑渡」に奉行人として登場するのは大乘院から別当が就任した場合においてであり、門跡以外の院家から別当が出された場合の坊官家については、今後さらなる検討を要する。

(10) なお、弘安元年記に見られる、通目代に宛てて正月廿三日付奉書を発給した信有については、福智院家に属する者ではなかったようであるが、「大乘院日記目録」文永五年（一二六八）五月日条に、「院家事連署、泰経、栄懐、信有、実忍、定専、良乗、良義、慶誉」とあることから、大乘院方で、門主の側近として活躍した人物であることがうかがわれる。

(11) 内閣文庫に延宝八年の写本が所蔵されている。

(12) この時は禪定院において行われているが、京都において請け取っている例も見られる（「大乘院寺社雑事記」文明十五年二月廿二日条）。

(13) 「恒例吉事」とは具体的に何を指すのか明らかでないが、「可勲行」とあることから諸法会をはじめとする年中行事全般を示すと推察される。

(14) 「大乘院寺社雑事記」文明十五年五月「印鑑昇之中綱問答記」に引用された「菩提山本願御記」に拠る。

(15) この「日記」とは吉書日記と見なされる。註(5)参照。

(16) 「次通目代封紙仁申御判、印箱封之、白紙封同付之」とある。

(17) 先に封をしたはずの箱を再度開封していることから、封紙を付するとはいうものの所作として形式的に行うものであったととらえられる。

(18) 「唐院古文書」所収「大乘院記録」には、「印鑑渡」における法花会・慈恩会・三蔵会の放請の次第が記されており、法花会請定の書様と併せて押印箇所を図示している。

其押印所々図

大供

伝灯法師位

右、請定 明年法花会堅義者如件、

建久九年 十二月廿七日

別当法印大和尚位権大僧都

(19) 「次供目代持放請退出、於公文所テ堅者三口法花会兼英、三蔵会、宗乗、光兼各鈍色放請以出世奉行進之、不入羅箱蓋者也」とあるように、残りの放請は出世奉行によって出された。

(20) 西金堂著座について、興福寺所蔵史料「興福寺役宗神擁護和讃」によれば、「西金堂著座ハ、秘所祝儀成ケリ」とあることから、春日社参と同様に就任の挨拶を目的としたものであろう。

(21) この「大誦諭」に関して、「大乘院寺社雑事記」文明十五年四月廿八日条に引用されている「故隆舜法眼記」によれば、「雑紙一束入程二竹ニテ台ヲツケテ、則雑紙一束入之、杉原十二枚続テ裏之、杉原一枚ヲ二切タ、ミテ結之、切灯心土器ノ長二切之、一把計歟、赤土器五六ノ間ニ置之」とある。

(22) 土谷忠「中世寺院の社会と芸能」（吉川弘文館、二〇〇一年）。

(23) 永村真「中世東大寺の組織と経営」（塙書房、一九八九年）。

(24) 東京大学史料編纂所に謄写本が架蔵されている。

(25) 高山有紀「中世興福寺維摩会の研究」（勉誠社、一九九七年）。

(26) 書様に付された註記によれば、縁舜によって発給された文書A～Cが折紙奉書であるのに対し、「寺務奉行」である清賢・継舜が発給した文書E～Kはいずれも堅紙奉書であり、公的色彩を帯びていたようである。なお、Dに関しては「立文云々」とある。

(27) 稻葉氏前掲書第七章第二節。

(28) (1)～(23)の番号は筆者が付したものである。

(29) 土谷氏前掲書。

(30) 寛正二年四月廿一日条によれば、「寺務奉行」は三蔵会の奉行として登場しており、また、文明二年（一四七〇）八月朔日条には、「一当年大会々勾当事、源乗権都那（維摩力）捧所望、付大納言律師了、大略寺務奉行申次之間、遣継舜法橋方畢云々」との記述が見られる。

（日本女子大学大学院文学研究科博士課程後期、

本館田中本・水木本調査プロジェクト研究協力者）

（二〇〇二年四月五日受理、二〇〇二年一月四日審査終了）

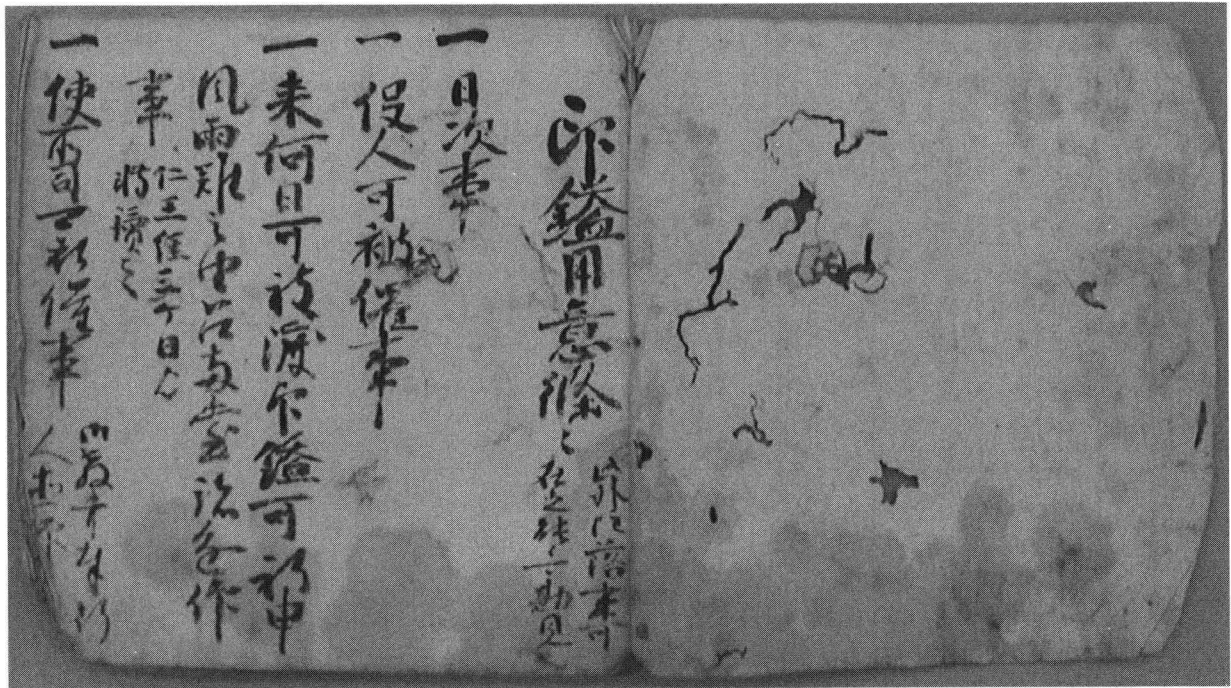
表 寛正二年三月十七日付発給文書一覽

K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A		
繼舜	繼舜	繼舜	繼舜	權上座繼舜	法橋清賢	法橋清賢	權上座繼舜	綠舜	綠舜	綠舜	差出	
会所目代御房(兼乗)	修理目代御房(光宣)	修理目代御房(光宣)	按察法橋御房(清賢)	上座法眼御房(隆舜)	通目代御房(并舜)	伊与權上座御房(繼舜)	信乃寺主御房 越前寺主御房	公文權上座御房(繼舜)	按察法橋御房(清賢)	八条權預	宛所	
来廿三日、被渡印鑑候、第三日 廿五日、御事并御一献事、	来廿三日、 (已廻) 候御事并御一献事、	来廿三日、 (已廻) 於東室被渡印鑑 候、	来廿三日、 (已廻) 印鑑之時可令沙 汰給候、	来廿三日、 (已廻) 於東室可被渡印 鑑候、	来廿三日、 (已廻) 於東室可被渡印 鑑候、	来廿三日、 (已廻) 於東室可被渡印 鑑候、	来廿三日、 (已廻) 於東室可被渡印 鑑候、	来廿三日、 (已廻) 可有西金堂御著 候、	来廿三日、 (已廻) 可有御社參候、	来廿三日、 (已廻) 為御祝申、	書出	
之由被仰出候也、恐々謹言、	之由被仰出候也、恐々謹言、	可令用意給候之由所也、恐々謹言、	之由所也、恐々謹言、	之由可申旨御氣色所也、恐惶謹言、	之由御氣色所也、仍執達如件、	之由御氣色所也、仍執達如件、	之由所也、仍執達如件、	之由、被仰出候也、恐々謹言、	之由、被仰出候也、恐々謹言、	之由、被仰出候也、恐々謹言、	書止	
廿三日の印鑑渡にあたり、第三日目の御一献の調進をするようにとの仰せである	廿三日の印鑑渡にあたり、御一献の用意をするようにとの命令である	廿三日の印鑑渡にあたり、假屋ならびに御棚以下、大炊替物等を用意するようにとの命令である(所役分を記す注文一紙あり)	廿三日の印鑑渡にあたり、御後見所役分を沙汰するようにとの命令である(所役分を記す注文一紙あり)	廿三日の印鑑渡に使所司として参勤するようにとの御氣色である	廿三日、東室において印鑑渡を行うことを心得ておくようにとの御氣色である	護監等の役人を招請するようにとの御氣色である	廿三日、西金堂著座の御前役として参仕するようにとの仰せである	西金堂著座の御前三綱として寛貞寺主・孝乗寺主を招請するように、同じく御前中綱についてても下知するようにとの仰せあり	両社御幣紙を用意するようにとの仰せあり	別当の御社参に参向するようにとの仰せあり	内容	



東院
印鑑渡條々
顚守

翻刻「印鑑用意條々」(水木家資料〔H12424456〕一帖
室町前期成立 折本(仮綴) 楮紙 一五〇糎×一四二糎 一六丁



印鑑用意條々 此外注落事可
在之、能々可勘見也、
2才
一日次事、

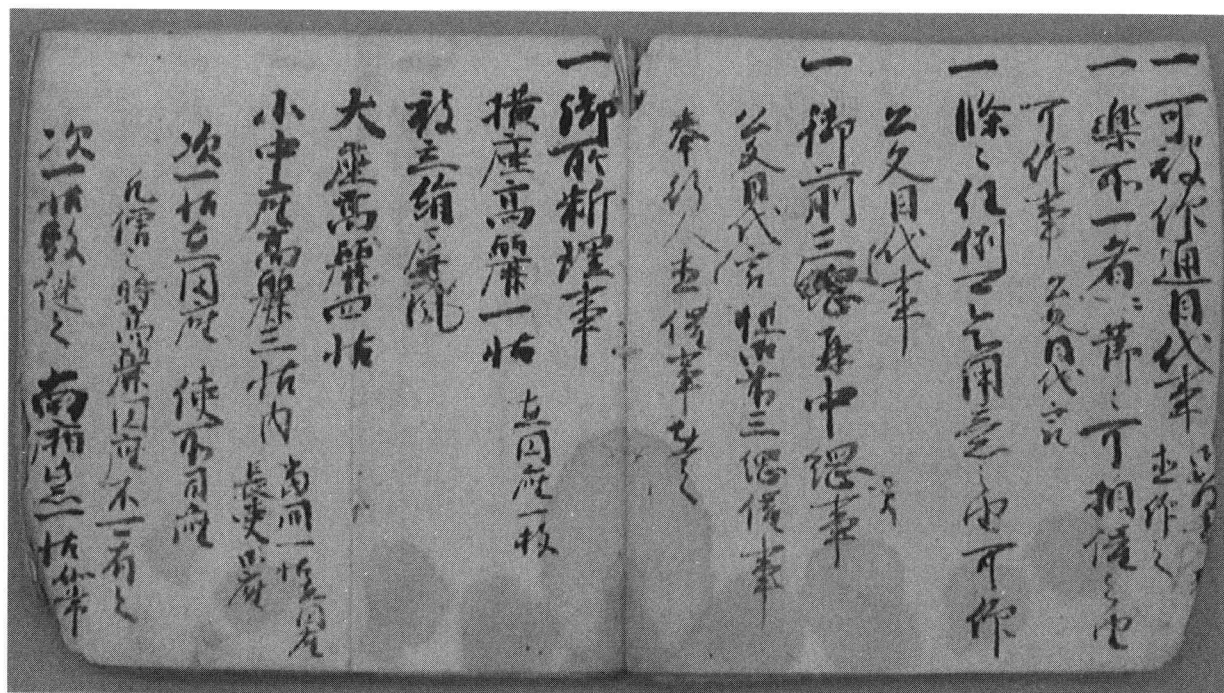
一役人可被催事、

一来何日可被渡印鑑、可祈申

風雨難之由、召両堂諸進仰

事、仁王經三ヶ日敷、
転読之、

一使所司可被催事、
御教書奉行
人直仰□之、

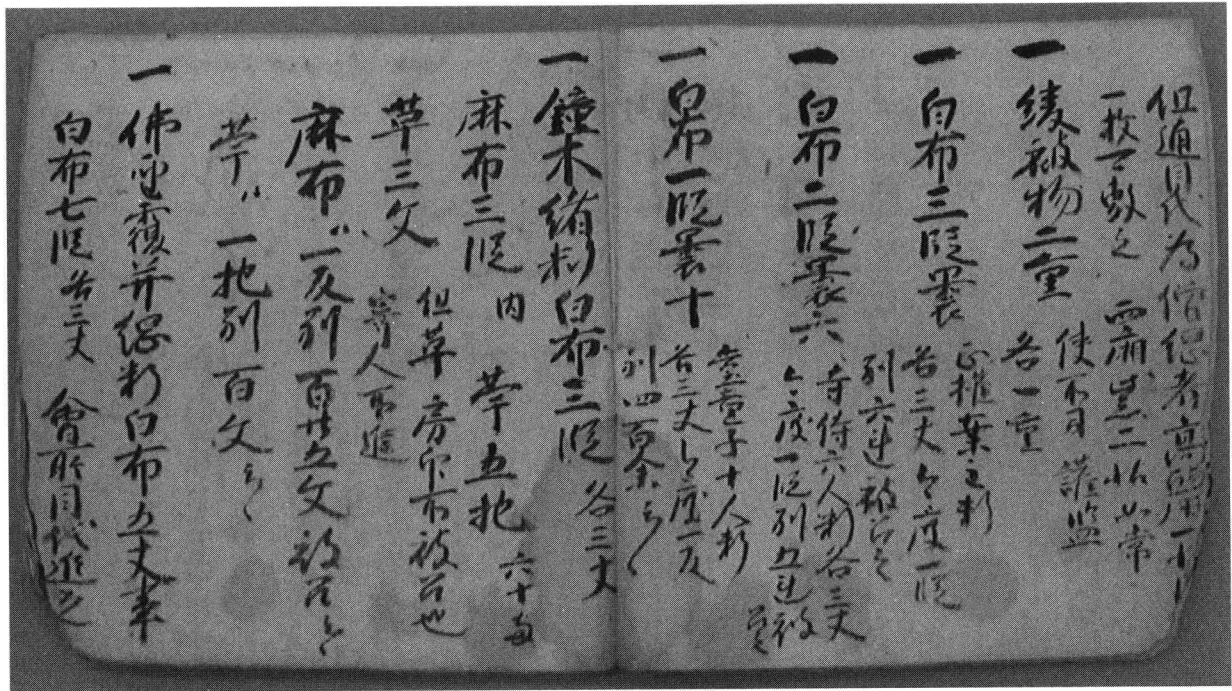


2 ウ

一可被仰通目代事、御教書奉 直仰之、
 一樂所一者二、節々可相催之由、
 可仰事、公文目代最、
 一條々任例可令用意之由、可仰
 公文目代事、
 一御前三綱并中綱事、
 公文目代最、但御前三綱催事、
 奉行人直催事在之、

3 才

一御所料理事、
 横座高麗一帖、在円座一枚、
 被立絹屏風、
 大座高麗四帖、
 小中座高麗三帖内、當間一帖、在円座、
 長吏御座、
 次一帖在円座、使所司座、
 凡僧之時、高麗円座不可有之、
 次一帖敷繼之、南廂紫一帖、如常、

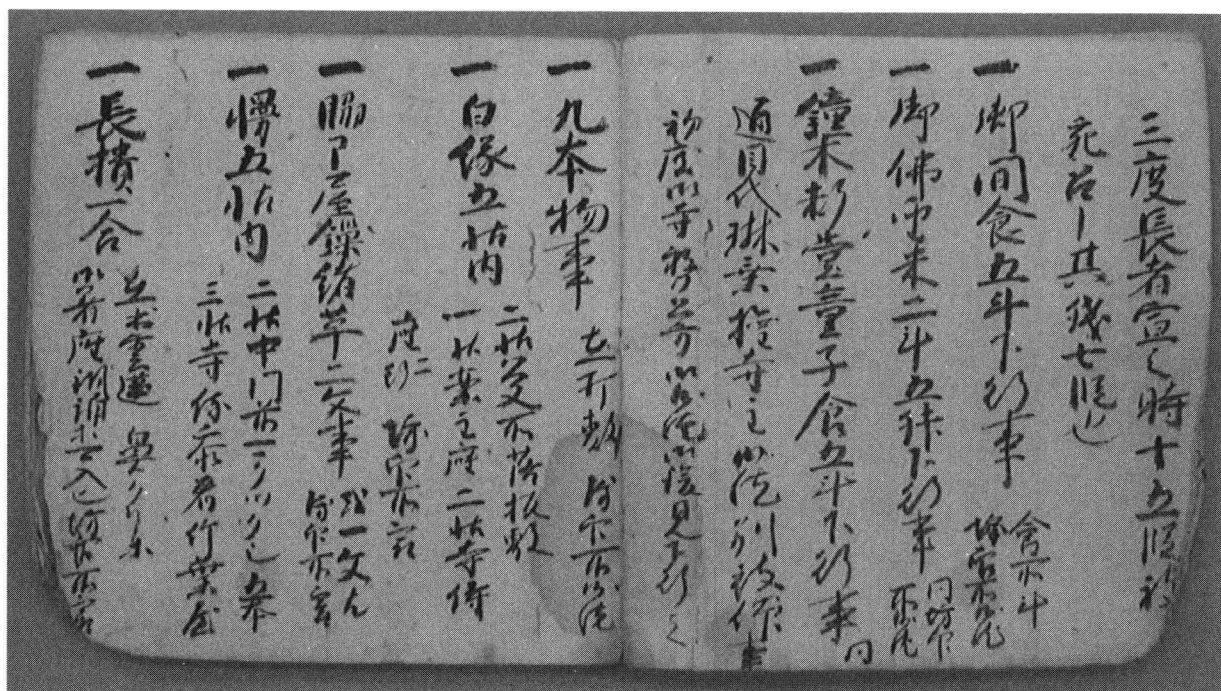


3ウ

但通目代為僧綱者、高麗一帖□
一枚可敷之、西廂紫二帖、如常、
一綾被物二重、使所司、護監、各一重、
一白布三段裘、正權案主料、各三丈、今度一段別六連被召之、
一白布二段裘六、寺侍六人料、各三丈、今度一段別五連被召之、
一白布一段裘十、堂童子十人料、各三丈、今度一反別四百余云々、

4才

一鐘木緒料白布三段、各三丈、
麻布三段、內、苧五把、六十兩、
草三文、但草房官所被召也、寄人所進、
麻布八一反別百廿五文被召云々、
苧八一把別百文云々、
一仏聖覆并綱料白布五丈事、
白布七段、各三丈、會所目代進之、



4 ウ

三度長者宣之時、十五段被
宛召了、其残七段也、

一御間食五斗下行事、會所斗、坊官所沙汰、

一御仏聖米二斗五升下行事、同坊官所沙汰、

一鐘木料堂童子食五斗下行事、同、

通目代琳乘權寺主沙汰別被仰事、

初度御寺務公方御沙汰、御後見下行之、

5 才

一 九本物事、在折敷、坊官所沙汰、

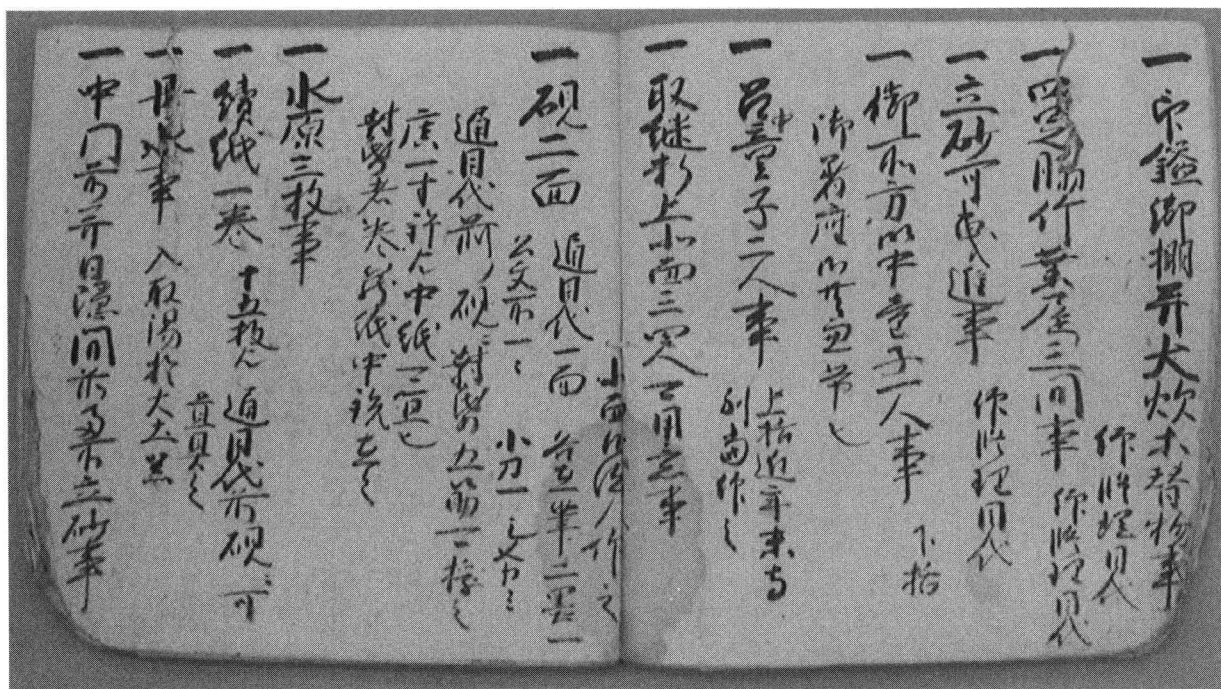
一 白縁五帖内、二帖公文所落板敷、
一帖案主座、二帖寺侍

座、坊官所最、

一 脇部屋鏤緒草二文事、或一文、坊官所最、

一 幔五帖内、二帖中門前マクツクシ五本、
三帖寺侍、参者竹葉屋、

一 長櫃一合、在出雲延、鼻クリ等、坊官所最、御着座諷誦等可入也、

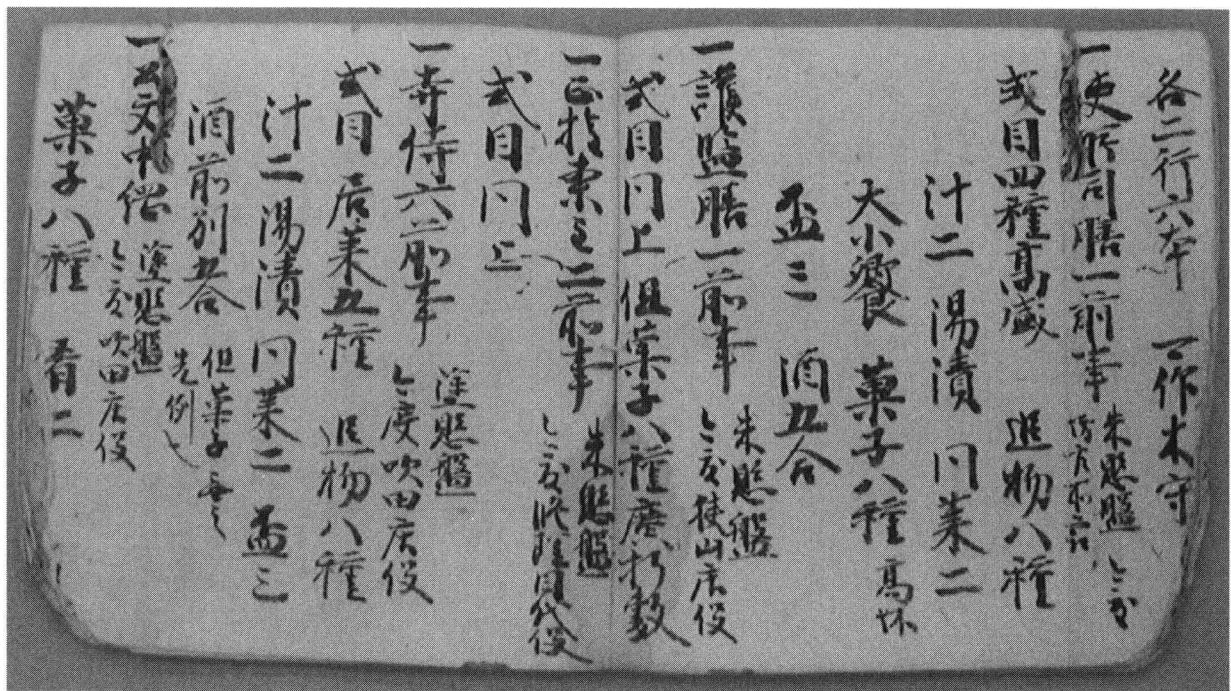


5ウ

- 一 印鑑御棚并大炊等替物事、
仰修理目代、
- 一 四足脇竹葉屋三間事、仰修理目代、
- 一 立砂可曳進事、仰修理目代、
- 一 御所方御中童子一人事、下括、
御着座御共兼帶也、
- 一 召童子二人事、上括、近年末寺
別當仰之、
- 一 取継料上北面三四人可用意事、

6才

- 一 硯二面、通目代一面、各在筆二、墨一、
公文所一、小刀一、シメカミ、
北面沙汰人仰之、
- 一 通目代前ノ硯ニ封帋五筋可授之、
広一寸許歟、中紙可宜也、
封帋者卷籠紙中説在之、
- 一 水原三枚事、
- 一 続紙一卷、十五枚歟、通目代前硯ニ可
置具之、
- 一 丹水事、入取湯於大土器、
- 一 中門前并日隠間前所立砂事、

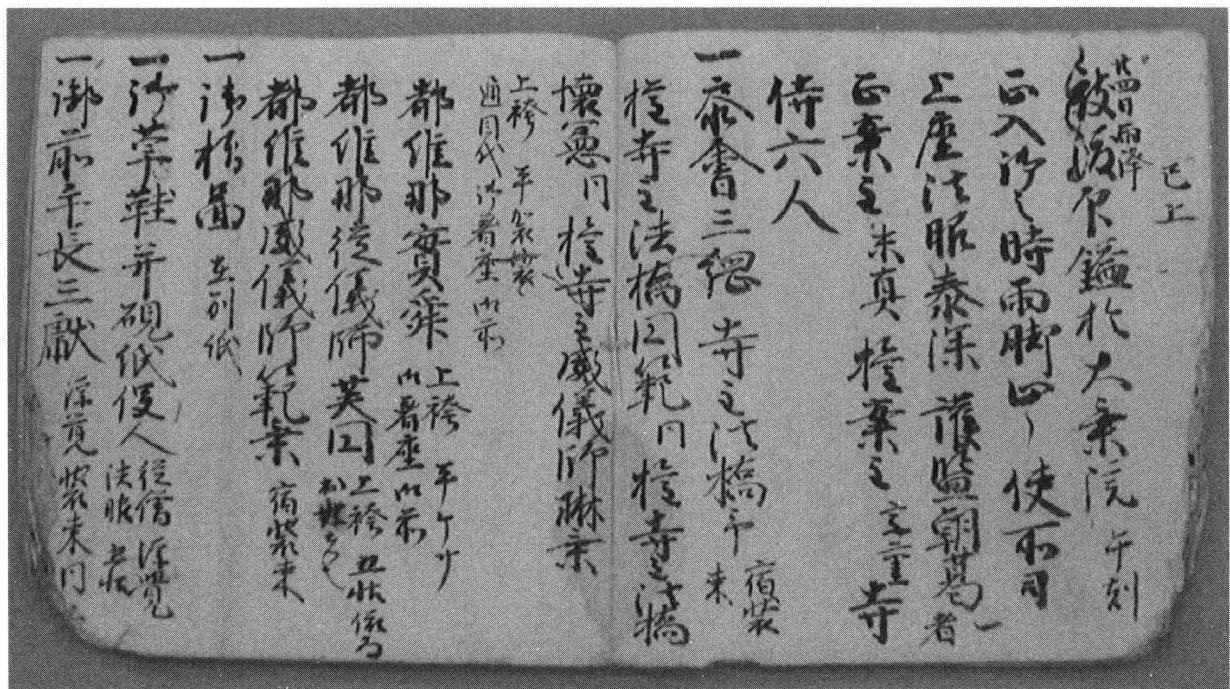


6 ウ

各二行六本、可仰木守、
一使所司膳一前事、朱懸盤、今度坊官所最、
式目四種高盛、追物八種、
汁二、湯漬、同菜二、
大小饗、菓子八種、高坏、
盃三、酒五合、
一護監膳一前事、朱懸盤、今度狭山庄役、
式目同上、但菓子八種広折敷、

7 才

一正権案主二前事、朱懸盤、今度修理目代役、
式目同上、
一寺侍六前事、塗懸盤、今度吹田庄役、
式目 居菜五種、追物八種、
汁二、湯漬、同菜二、盃三、
酒前別五合、但菓子無之、先例也、
一公文中綱、塗懸盤、今度吹田庄役、
菓子八種、肴二、

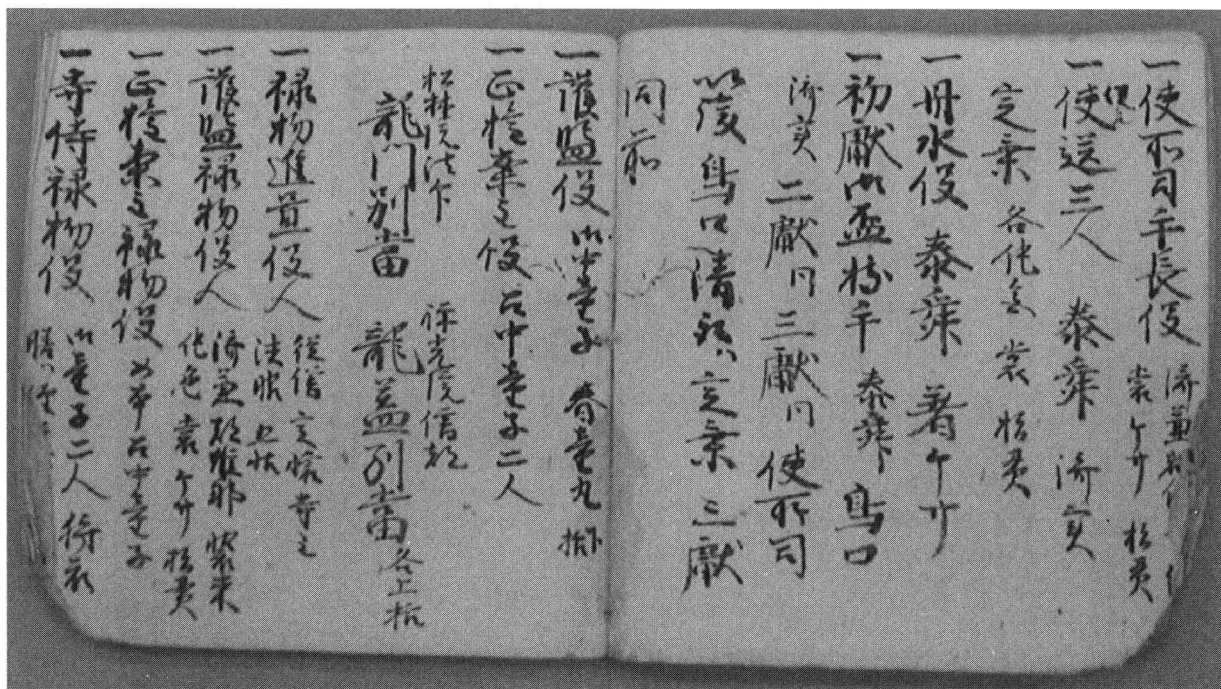


8才

7ウ

懷憲同、權寺主威儀師琳乘
上袴、平袈裟、
通目代御着座御前、
都維那実舜 上袴、平ケサ、
御着座御前、
都維那從儀師英円 上袴、五帖、依為
出世者也、
都維那威儀師範乘宿裝束、
御指図、在別紙、
御草鞋并硯紙役人、從僧源覺、
法服、五帖、
御前手長三献、深覺、裝束同□、

已上、
廿四日雨降、
被渡印鑑於大乘院、午刻、
正入御之時、雨脚止了、使所司
上座法眼泰深・護監朝葛者、
正案主末真、權案主宗重 寺
侍六人、
一參會三綱、寺主法橋予 宿裝束、
權寺主法橋円範同、權寺主法橋

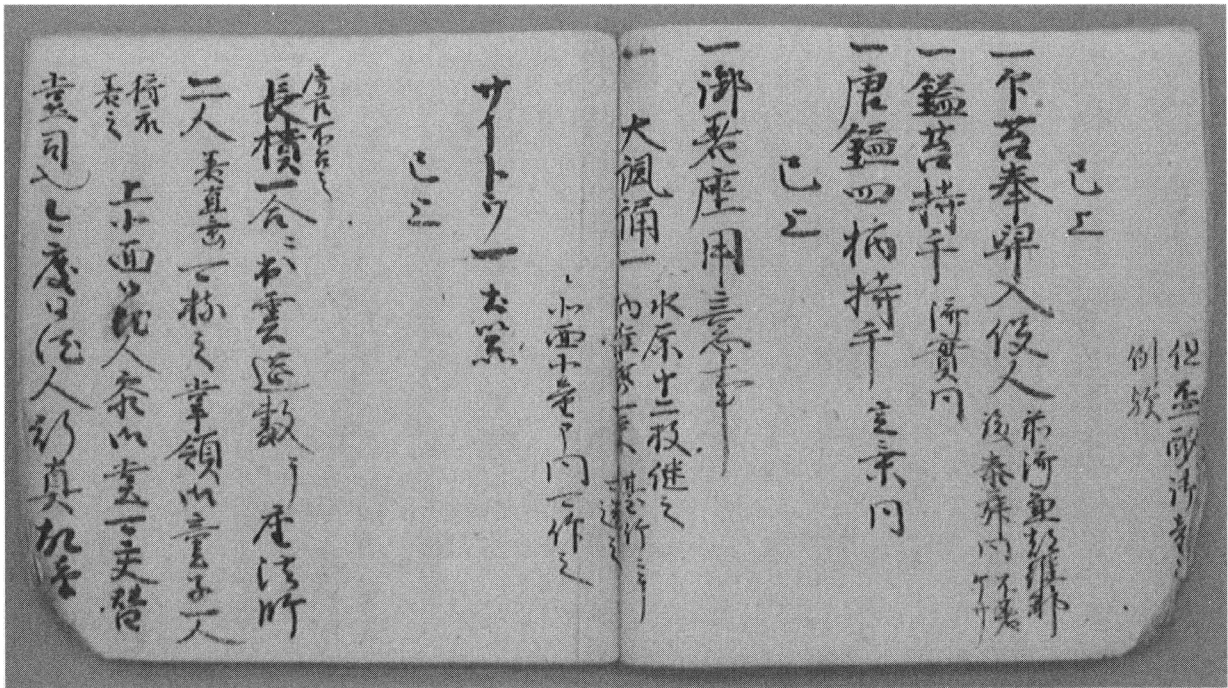


8 ウ

一使所司手長役、濟兼都□□□
役、ケサ、指貫、
一使送三人 泰舜 濟実
定乘各鈍色、裳、指貫、
一丹水役 泰舜 着ケサ、
一初猷御盃持手、泰舜、鳥口、
濟実、二猷、同、三猷、同、使所司
以後鳥口請取八定乘、三猷
同前、

9 才

一護監役、御中童子 春童丸、括、下
一正權案主役、召中童子二人、
松林院法印 禪光院僧都
龍門別當 龍蓋別當、各上括、
一祿物進置役人、從僧定懷寺主、
法服、五帖、
一護監祿物役人、濟兼都維那、裝束
鈍色、裳、ケサ、指貫、
一正權案主祿物役、如本召中童子、
御童子二人、狩衣、
一寺侍祿物役、
膳ハ□□□□
仰



9ウ

已上、

但盃酌御□□□□
例歟、

一印莒奉昇入役人、
前済兼都維那、
後泰舜同、不着、
ケサ、

一鑑莒持手、
済実同、

一唐鑑四柄持手、
定乗同、

已上、

一御着座用意事、

一水原十二枚繼之、
納雜紙一束臺竹ニテ
可造之、

一大諷誦、

10才

北面小童部同可仰之、

サイトウー、土器、

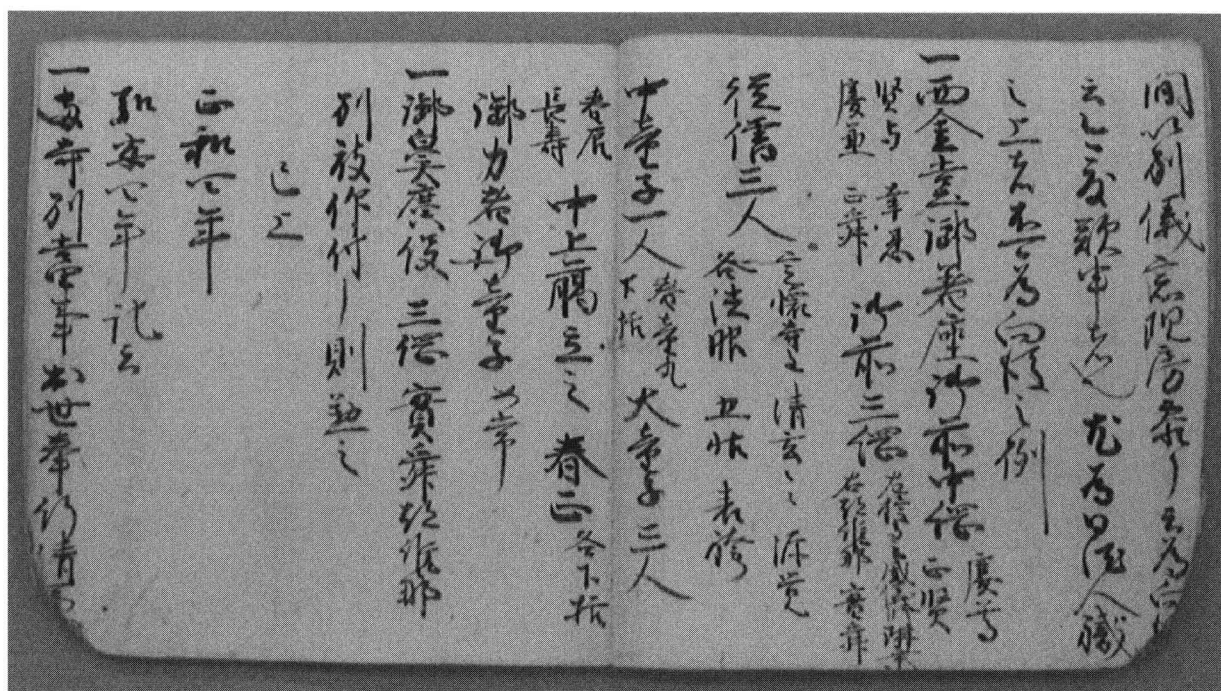
已上、

長櫃一合ニ出雲庭敷テ、座法師
房官不召之、

二人、着直垂、可持之、掌領御童子一人、

着之、上北面沙汰人參御堂、可交替

堂司也、今度沙汰人行真故障



10ウ

間、以別儀宗現房參了、云為向後、
云今度、歎申者也、尤為沙汰人職
之上者、不可為向後之例、

一西金堂御着座御前中綱慶尊
正賢

賢与 幸忍
慶兼 正舜 御前三綱左權寺主威儀師琳乘、
右都維那実舜、

從僧三人、定懷寺主 清玄、
各法服、五帖、表袴、源寛

中童子一人、春童丸、
下括、大童子三人、

11才

春辰
長壽 中上臈立之、春正、各下括、
御力者御童子、如常、

一御鼻広役 三綱 実舜都維那

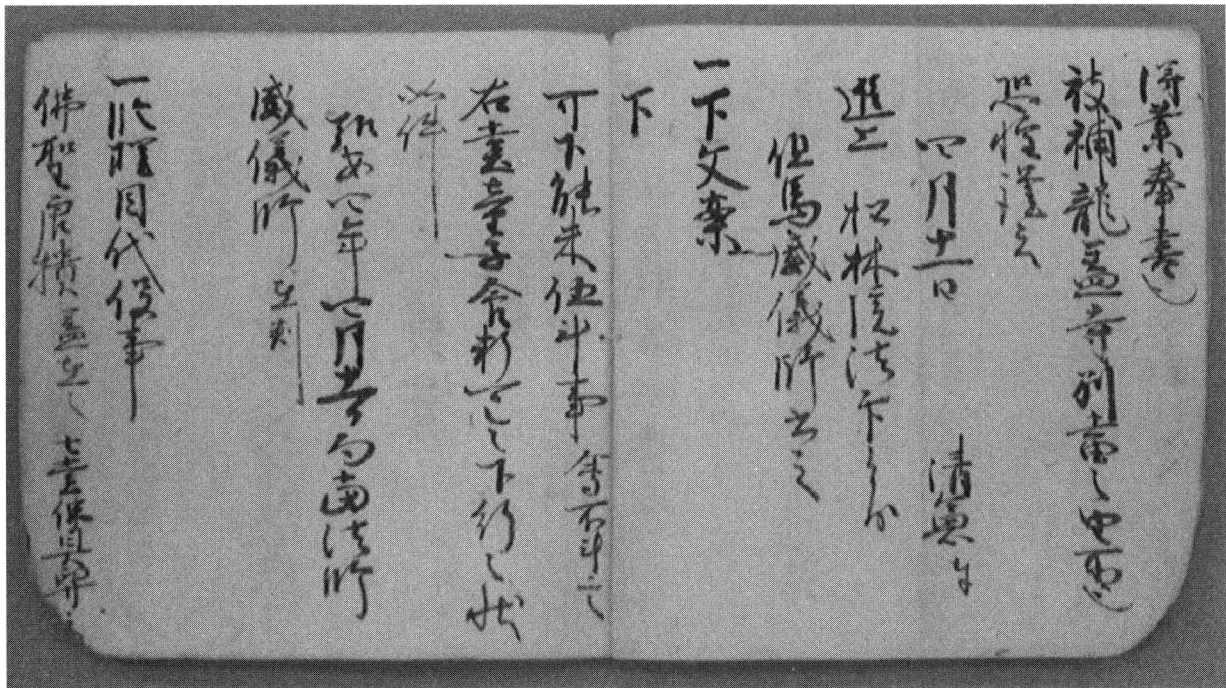
別被仰付了、則歎之、

已上、

正和四年

弘安四年記云、

一當寺別当事、出世奉行清憲

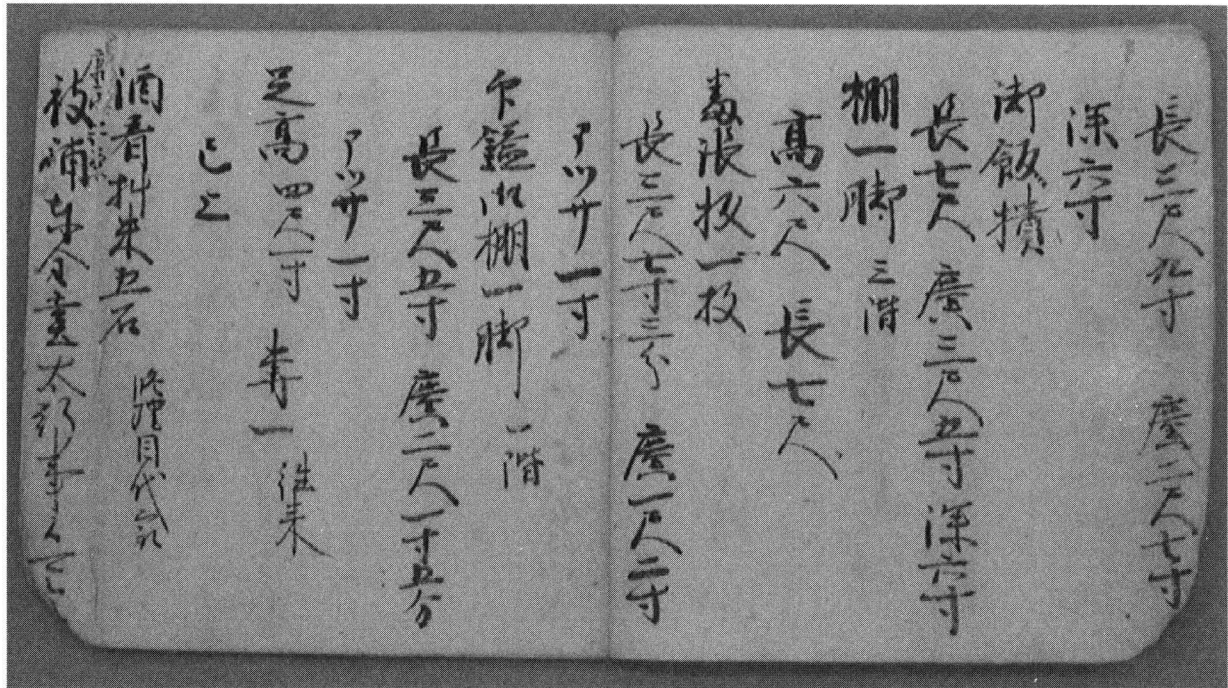


11ウ

得業奉書也、
被補龍蓋寺別當之由所候也、
恐惶謹言、
四月十一日 清憲奉
進上 松林院法印御房
但馬威儀師書之、
一下文案
下

12才

可下能米伍斗事、會所斗定、
右、堂童子食料可令下行之状、
如件、
弘安四年四月十一日勾當法師
威儀師在判
一修理目代役事、
仏聖唐櫃、蓋在之、七堂仏具昇之、



12ウ

長三尺九寸 広二尺七寸
深六寸

御飯櫃

長七尺 広三尺五寸 深六寸

棚一脚三階

高六尺 長七尺

番張板一枚

長三尺七寸三分 広一尺二寸

13オ

アツサ一寸

印鑑御棚一脚二階

長三尺五寸 広二尺一寸五分

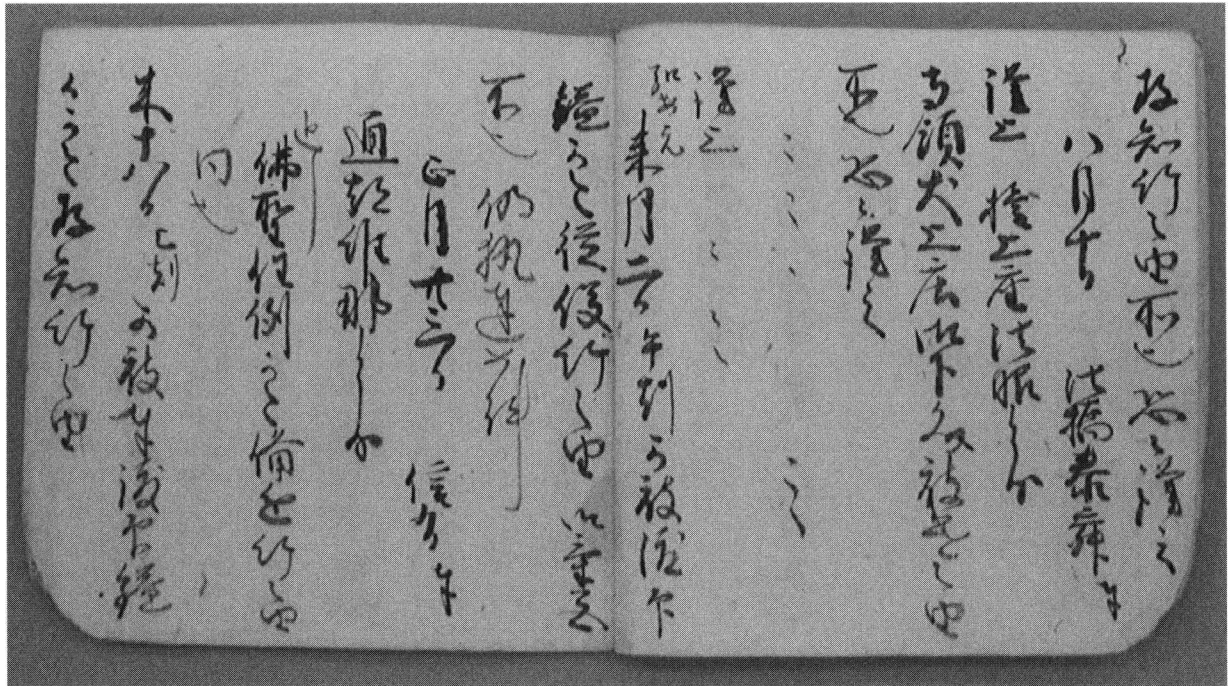
アツサ一寸

足高四尺一寸 専一往来

已上、

酒肴料米五石、修理目代最、

康永二案
被補束金堂大行事候、可令

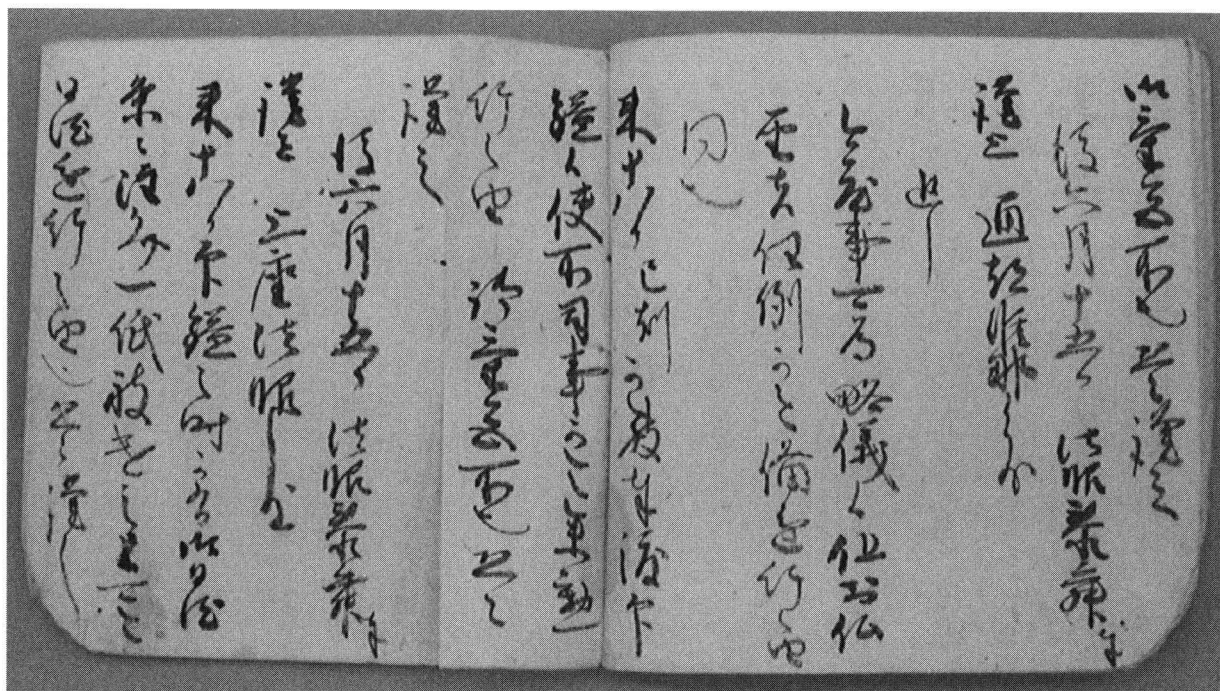


13ウ

存知給之由所也、恐々謹言、
八月十日 法橋泰舜奉
謹上 権上座法眼御房
寺領犬上庄御下文被遣之由
所也、恐々謹言、
、、、、、
謹上 、、、
弘安元
来月二日午刻、可被渡印

14才

鑑、可令從役給之由、御氣色
所也、仍執達如件、
正月廿三日 信有奉
通都維那御房
追申、
仏聖任例可令備進給之由
同也、
来十八日巳刻、可被奉渡印鑑
候、可令存知給之由、



14ウ

御氣色所也、恐々謹言、

後六月十五日 法眼泰舜奉

謹上 通都維那御房

追申、

今度事、可為略儀候、但於仏聖者、任例可令備進給之由

同也、

来十八日巳刻、可被奉渡印

15才

鑑候、使所司事、可令參懃給之由、御氣色所也、恐々

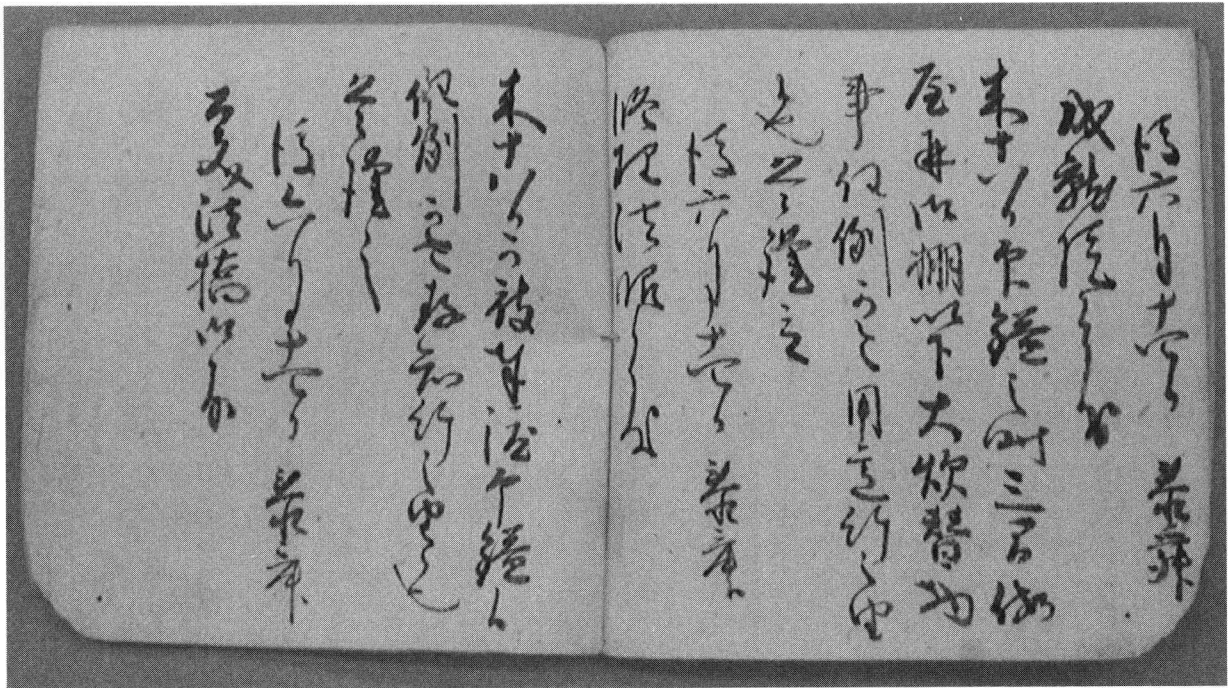
謹言、

後六月十五日 法眼泰舜奉

謹上 上座法眼御房

来十八日、印鑑之時、可有御沙汰条々、注文一紙被遣之、且可令

沙汰進給之由也、恐々謹言、



15ウ

後六月十四日 泰舜
成就院御房

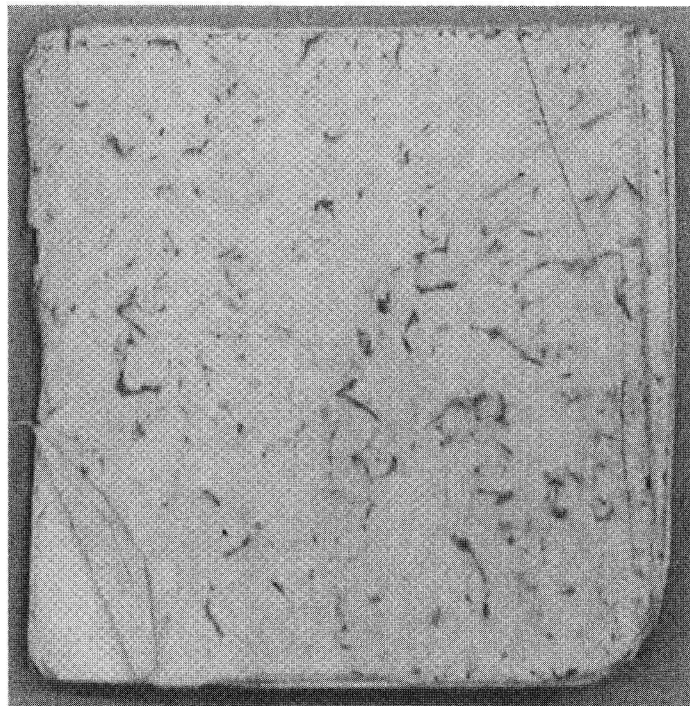
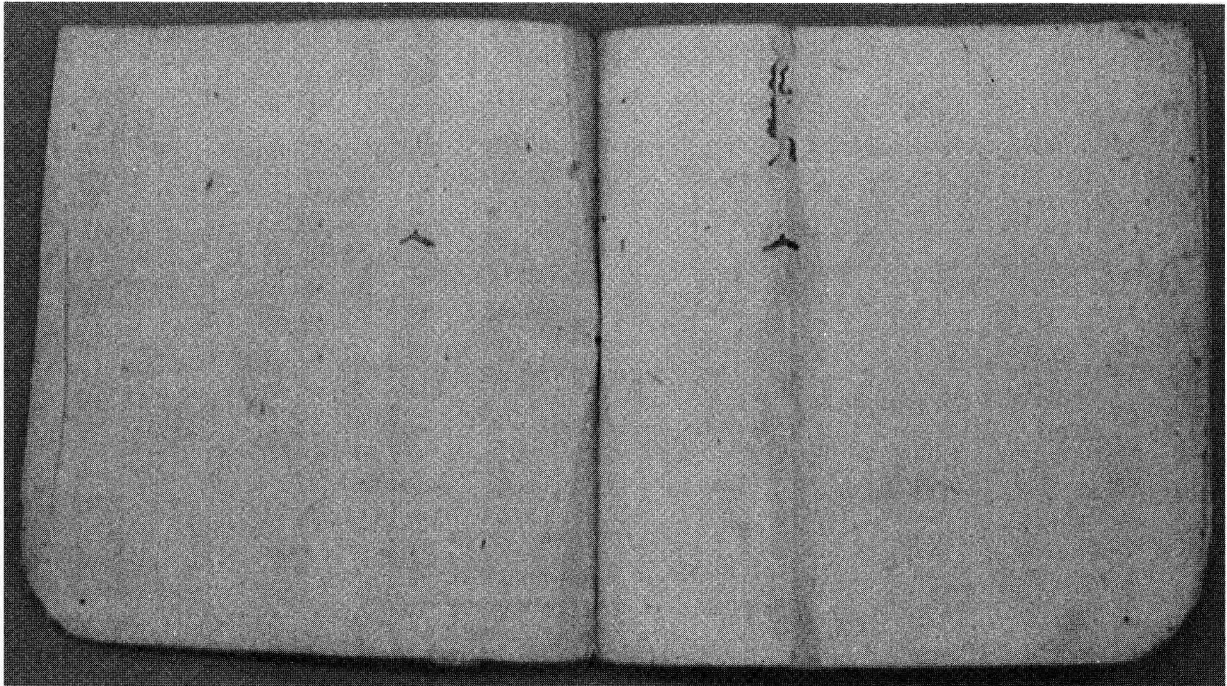
来十八日、印鑑之時、三間假
屋并御棚以下大炊替物
事、任例可令用意給之由
候也、恐々謹言、

後六月十四日 泰舜
修理法眼御房

16オ

来十八日、可被奉渡印鑑候、
任例可令存知給之由候也、
恐々謹言、

後六月十四日 泰舜
公文法橋御房



Protocol for Inducting Stewards into Kofukuji Temple in the Middle Ages as Seen through the Inyaku Yoi Jojo

NISHI Yayoi

This paper examines Inyaku Watashi (Inyaku Transfer), which was one of the protocols for inducting stewards into Kofukuji Temple. It has been determined that the Inyaku Yoi Jojo (provisions for preparing official seals and keys to storehouses ; from the Mizuki archives), which is currently in the possession of the National Museum of Japanese History, was written by Akimori in the early part of the Muromachi period, and was passed down through Toin, one of the sub-temples of Kofukuji Temple. The text focuses on the preparations for the Inyaku Transfer, and it contains excerpts from the records of Daijoin.

The proceedings for inducting stewards into Kofukuji Temple consist of a series of steps that include the appointment of the steward through an oral declaration, an edict from the head of the Fujiwara clan, the reporting of the appointment to the Kasuga Taisha shrine, and finally the conducting of the Inyaku Transfer. The procedures for the Inyaku Transfer consist of a Felicitous Document ceremony, the issuance and acceptance of notices for three Buddhist masses to commemorate three great priests (Sanzoe ceremony, Hokae ceremony, and Jione ceremony), as well as a seating ceremony in the kondo (main hall). The primary purpose of the Inyaku Transfer ceremony is to publicly announce the induction of the new Steward to temple society, and the Felicitous Document, with the seal of the newly appointed Steward, as well as seals on the notices are considered to be symbolic conduct of the Inyaku Transfer.

The jimu-bugyo, the temple affairs magistrate, played an important role in carrying out the Inyaku Transfer procedures. The jimu-bugyo performed a variety of duties, including issuing and providing written invitations to those in various positions, preparing utensils, and keeping records. If the Steward was appointed from either of the two monzekis (temples inhabited by ordained members of the imperial family) Daijoin or Ichijoin, it was customary for the best bokan (attendant to an ordained member of the imperial family) or samurai warrior to be selected as the jimu-bugyo, and it has been confirmed in several instances that the jimu-bugyo was selected from the Fukuchiin family, a highly respected attendant family at Daijoin.

In light of this inquiry into the actual protocols, preparations and implementation of pro-

cedures for the Inyaku Transfer, and given the background to the writing of the Inyaku Yoi Jojo, we can assume that Akimori, who was selected to assume the position of jimu-bugyo to perform the Inyaku Transfer for the induction of the Steward to the head of the Toin temple, referred to records held at Daijoin and extracted passages concerning the jimu-bugyo from those records.